農空間（のうくうかん）

第　５９　号

発　行　所
福島県農林水産部
農　村　計　画　課

【特集】「田んぼの学校」「畑の学校」今年も元気に実施！

県内各地の農家の皆様方が『先生』となり、田んぼや畑、水路や里山などの農村の自然環境を『学校』に見立てて授業を行う「田んぼの学校」「畑の学校」が今年も各地で元気に実施されました。

この取組は、『ふくしまの農育』推進事業の一環として行われています。本事業は、農村地域の重要な要素である自然環境を学びの場として活用し、体験活動をとおして農地や土地改良施設への理解を深めるとともに、「農業・農村地域の大切さ」、「環境の大切さ」、「食・命の大切さ」について理解を深め、豊かな感性と深い見識を持った子どもたちを育てることを目的としています。

今年はモデル校として県内６校が選定され、それぞれが学校近隣の田んぼや畑で一年に渡って活動に取り組みました。春の開校式、田植え（苗植え）に始まり、草取りなどの日常的な管理を行うとともに、農地や水路などに棲む生きものを調べる生きものの調査、農業を支えるはたらきを持つ土地改良施設や県農業総合センターの見学等を行い、農業に関する知識を深めてきました。そして、秋には自分たちで育てた稲・野菜を収穫する喜びを味わうことができました。

授業を受けた子ども達からは「初めての稲作りで楽しかった」「野菜をもっと作りたい、もっと知りたいと思った」「生きもの調査では、見たことのない生きものがいて面白かった」などの声が聞かれ、農業・農村地域への理解や興味を深めることができました。一人でも多く未来の農業・農村地域の担い手が育ってくれるよう、県では今後もこの取組を続けていきます。

【農村振興課】

田植え（赤井小）

生きもの調査（棚倉小）

いもほり（大山小）

ランタンづくり（只見小）

もちつき（母畑小）

稲刈り（赤井小）

ふくしま復旧便　―県内からのお便り―

県中

―動き出した藤沼湖周辺地域の災害復旧工事―

県中農林事務所管内における東日本大震災の復旧状況は、平成25年11月末で、総数667地区のうち54地区が完了したところです。特に、全体の約6割を占める須賀川市における発注状況は「ため池」を主に23箇所を残すのみで、一日も早い着工に向けて国からの技術者派遣のもと鋭意取り組んでいます。

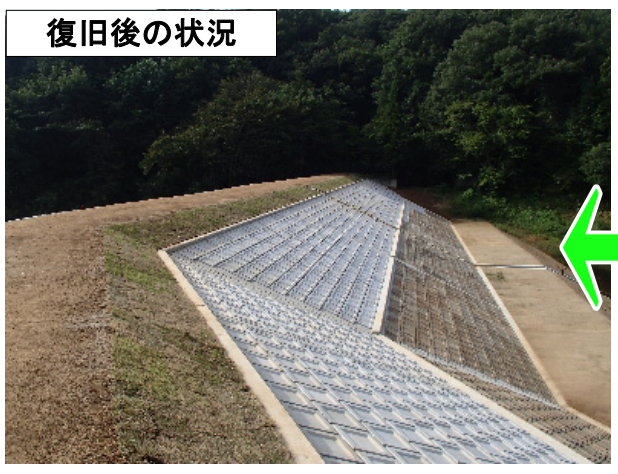
藤沼ダムの復旧については、学識経験者から構成される「福島県藤沼ダム復旧委員会」において3・11東日本大震災の地震動に対しても安全なダムとして復旧できることが確認され、本委員会の指導助言を得ながら詳細設計を進め、その節目において地元説明を重ねてきたところです。

藤沼ダム復旧工事は平成25年10月9日に契約となり、同15日に着工し、関係するほとんどの工事が動き出しました。

地域の安心につながるよう、10月30～31日に「藤沼湖周辺地域に関する災害復旧工事の進め方について」として、安全で円滑な工事の実施、誰にでも見える（可視化）施工状況、工事情報の定期発信等について説明しました。また、関係工事全8件の受注者間において「安全衛生連絡協議会」が設立され、11月25日には安全祈願式が質素かつ厳かに執り行われ、藤沼湖周辺地域の復旧復興が本格的にスタートを切りました。

今後とも、安全安心のもとに平成28年度の藤沼ダム完成に向けて関係者一同、一丸となって取り組んでまいります。

【県中農林事務所】


復旧後の状況

決壊した中池（須賀川市）

地域に根ざした水土里ネット【特別寄稿】
―「土地改良区」って何だろう―

会津大川土地改良区　事務局長　佐竹　孝さん

後任へ道を譲る時期が近づきましたので、思いついたことを書きたいと思います。

東京で５年間輸出入関連に携わっていたころに、実家からＵターンの話があって、勤めたのが現在の会津大川土地改良区でした。

はじめの頃は、施設位置や集落の把握、そして国県事業の説明会など、慣れない環境の中でとても大変だったのですが、自分は当時マラソンで鍛えた体力・気力が十分だったため、どうにか乗越えられたと思っています。

苦労といえば、平成16年度の土地改良区統合で、関係62集落全てを1ヶ月半休みなしで説明会を開き、ようやく全組合員から同意を頂いた事を思い出しますが、その時私は、地元本郷スポ少の監督の他、ソフト、バレー、バドミントンと多種多様なスポーツに手を出していたことで地権者の方々との絆も深まり、説明会では快く了解が得られるなどということもありました。

さて、土地改良区は、その役割や水の行方、農業用以外の機能（生活、防火、消雪・親水機能等）を市民に広く周知してもらうのも重要な責務だと考えています。

当改良区管内では、ホタル祭りの紙芝居や水車の公園付近の見学、白山沼の地域住民と関係機関によるクリーン作戦等を実施し好評を得ており、水土里ネット施設めぐりウォーキングは、今年で記念の10回目になりました。

これからも啓蒙のソフト事業も、農家負担軽減を図るハード事業同様に力を入れて進めてもらいたいと思います。

最後に足腰の強い農家育成のため土地改良区体制の強化が必要であります。それにはまず職員が足腰の強い人間になるために、休日等は何か一つでもスポーツを楽しむことをお勧めします。

必ず仕事にプラスになると信じています。

小学生たちに水路の説明

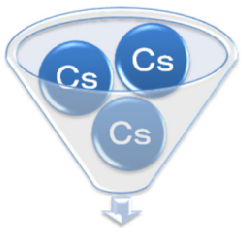
馬越頭首工

ピンチをチャンスに

農地管理課は、従来担当テーマの国営調整、施設管理、換地等の外に、震災等からの復興のための特設（特命？）課題を解消するため日夜奮闘中です。それは①防災減災の主役は誰だ？②セシウムとのながぁ～いお付合いはどぉする？③換地の常識を打ち破れ！の３テーマ。

①は昨年スタートの「水土里の防災力アップ運動」。施設点検強化・耐震検証促進に加え、無理やりため池の決壊を想定した浸水定図をもとに地域の皆さんで『想定外』の議論をしていただき、減災力の向上を目指します。

②は「宿命のライバル」セシウムとの長期戦に備え、世界初ＣＳ見張りシステムの構築であり、農水省・土地連等とタッグを組み地域を走り回っています。



ふくしま 水土里の 防災力アップ運動

③は、津波被災地のほ場整備を通じ、新時代の換地の在り方実現の一歩を踏み出すべく国に物申しています。（③課題詳細は、本紙前号参照）

どれもピンチをチャンスに変える新生福島県の農業農村再構築プロジェクトです。皆さんそれぞれの場面で、一緒に力を合わせましょう！

農地管理課長　菊地　和明

トピックス

○農村の良さを再発見！写真コンテスト表彰式を開催！

平成26年1月10日に福島県土地改良会館において、「ふくしま むらの輝き２０１３」写真コンテストの表彰式が開催されました。

このコンクールは、福島県農地・水・環境保全向上対策地域協議会が主催し、農村地域の持つ「良さ」を見つけ、農村を守り育てていくこと、農地・水・環境保全に向けた取組などを多くの県民の皆様に知ってもらい、農業・農村に対する機会を深めることを目的に、２００８年から継続して実施しており、今回で第６回目となりました。

今年は、県内外から農村の風景や地域ぐるみでの保全活動などの写真、１７７点の応募があり、平成25年12月に行った審査会で、最優秀賞などの各賞が決定しました。

表彰式では、最優秀賞の齋藤祐一さんを始め、受賞者の皆様方に、地域協議会の櫻田浩二会長から賞状が授与されました。

来年度のコンクールについては、詳細が決まり次第、福島県農地・水・環境保全向上対策地域協議会のホームページに掲載する予定です。皆様方からのご応募をお待ちしております。

【農村振興課】

【優秀賞】学校田の稲刈り

【最優秀賞】収穫の頃

【優秀賞】豊作の会津平野

【優秀賞】満開の桜の下で

【優秀賞】収穫のよろこび

ふくしまからはじめよう。―イベント情報―

平成26年2月8日（土）13時から、郡山市のホテルハマツで開催する「『食』と『ふるさと』安全・安心シンポジウム」の参加者を募集中です。

福島県の農家の皆さんは、心を込めてつくった農産物について、様々な検査を行い、お客様へ安全・安心とともにお届けしています。

しかし、本県産農産物への不安を抱いている方々も少なくない状況です。

そこで、こうした不安を解消するため、生産者や流通業者・消費者の皆様と共に考えるシンポジウムを企画しました。

当日は、「あした何を食べますか？」と題して、朝日新聞文化くらし報道部編集委員の大村美香さんに基調講演をしていただきます。

また、その他にも、最新の研究成果発表やパネルディスカッションも行います。

参加費は無料となっておりますが、事前の申し込みが必要です。シンポジウムの内容や申込方法などは、福島県農林水産部農林企画課のホームページでご確認ください。

たくさんの皆様のご参加をお待ちしています。

【農林企画課】

食とふるさと新生運動　検索

○いざ！　復興へ　金沢・北泉地区が着工

東日本大震災から２年９か月が経過した平成25年12月に、南相馬原町区において、県内初の復興総合整備事業でのほ場整備工事に着手する「金沢・北泉地区」の安全祈願祭が関係者の出席のもと執り行われました。

安全祈願祭では、まず震災で犠牲になられた方々へ黙とうを捧げてから、工事の安全と一日も早い復旧復興を祈りました。

当日は、雲一つない晴天となり、明るい陽射しが射すなか、出席者は、改めて復旧・復興への決意を誓いました。

当管内では、課題も多いですが、全国から温かいご支援を頂き、一歩ずつ着実に復旧・復興を進めております。

【相双農林事務所】

祈願祭の様子

【編集後記】

農空間も今年度、最後の発行となりました。

思い返せば、この農空間の担当となったのは、東日本大震災の直後で、最初は、震災被害の特集号でした。それを含めて、10回発行しましたが、復旧・復興へ向けた取組のほかにも、徐々に今号の特集のような震災前から取り組む明るい話題も増えてきたと思います。今後も、農空間は型にとらわれず、より多くの皆様に愛読していただける広報誌にしていきたいと思っています。

さて、昨年度発行した第55号のこのコーナーで、毎年撮影し続けると誓った「初日の出」。今年は、２日の撮影になってしまい「初日の出」ではありませんが、買ったばかりのカメラで撮影してきました。

来年も、また「初日の出」を撮影して、読者の皆様へ写真撮影の技術が今年より上がっていることをお見せしたいと思っていますので、お楽しみに。

（編集担当　Ｙ・Ｍ）

南相馬市の海岸にて（2014.1）

『農空間』とは・・・
農村において繰り広げられる農業の営み、それを支える農地や水、人々の生活、そして、美しい自然に囲まれ長い間に培われた伝統・文化などが溶けあった空間のことです。